

## 「一億総活躍社会」

昨日のレポートで「新三本の矢」どこか変だと書いた。時の官房長官からは「産めよ増やせよ」の政策を連想させる発言が飛び出す。「一億総活躍社会」という言葉にも、なんだか違和感を覚えた。

そんな折、朝日新聞 10 月 1 日の「天声人語」は同感するところが多く、久しぶりに書き写しておきたい。

違和感という言葉は、なるべく使いたくない。辞書には、なんともいえない嫌な気分、しっくりしない感じ、などとある。何かを批判する時に「違和感がある」と言うと、もっともらしく聞こえるが、言われた方は具体的にどうすればいいかわからない▼

とはいえ明確な言葉がすぐに出てこない時には便利である。「一億総活躍」社会と聞いて直ちに感じたのは、まさに違和感だった。安倍首相が新たに掲げた目標だ。一人ひとりが職場や地域でもっと活躍できる社会を目指すという。一億総活躍プランを作り、担当相も置く▼

類似の言い方を思い出す人は多いだろう。敗戦直後の「一億総懺悔」、近いところでは「一億総中流化」。こうした表現ぶりは、大げさで大雑把だが、耳には入りやすい▼

違和感の出どころの一つは活躍という言葉だと思う。めざましく活動すること。だが、活躍できない人、活躍したいと思わない人も社会にはいる。「総」の中に入れない人、入りたくない人には息苦しく感じられる標語ではないか▼

もう一つ。活躍しているか否かには、「女性が輝く」か否かと同様、客観的な指標がない。「所得倍増」のような政策目標なら数値ではっきり結果が出る。掲げるには歴史の審判を受ける覚悟もいる。総活躍は、その覚悟に裏打ちされているのか▼

「総」は「個」の対極にある。総活躍は、個々の国民を一くくりにして上から号令をかけているかのようにも聞こえる。「総動員」の語は連想したくないけれど。



翌 2 日の朝日新聞「風刺漫画」には、「鶴のごとき心地なり マイナンバー」とあった。マイナンバーで「一億総縛り」するかのようだ。国民が「活躍」しているかどうか、マイナンバーを使いチェックでもするのだろうか。

(2015 年 10 月 5 日)